



TITLE:

西[遊]夢録(五)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(五). 地球 1928, 9(2): 145-151

ISSUE DATE:

1928-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183392>

RIGHT:

淺川鑛泉 同上 折尾
 吉井鑛泉 糸島、福吉 單純泉 一五度 花崗岩
 楠田鑛泉 朝倉、杷木 一五度
 東古賀谷鑛泉 八女下妻 單純泉 一七度
 藤田鑛泉 八女、下廣川 同上 一六度

西遊夢錄

(五)

瀧川規一

葛尾 三井、高良内 同上 一四度
 其他湯川(金敷)湯場(遠賀)湯山(田川)帝王(田川)板谷、門前(嘉穂)松瀬(八女)舟小屋(八女)長田(八女)中山(八女)湯ノ浦(嘉穂)梅(嘉穂)湯場(田川)神湊(宗像)今宿(糸島)吉井(糸島)大石(糸島)脇山(早良)椎原(早良)以下省略等が在る

(VI) アバチーン(Aberdeen)

その一

旅のうちの旅のこととして行方も知らぬ北緯五十七度以北の町へ、眞夜半に船から自動車にて運ばれ、町内の位置すら判明せぬ友人の故家にと急ぐ、時には何となく心淋しさを感じる。眞夜半に他人の家に泊り込むことの異常なるにまして異邦人にして初対面の身である。如何に挨拶すべきやと戸を叩く間も心秘かに煩ふ。戸を叩くと案に相異してエルダ老人は日本流に「話は明朝のことにしやう」とてあつさり片付けるさう云つて吾がストークスを提げて老人はさつさと最上階の寢室に案内して呉れる。この寢室は日本に居るチャールズ(同僚のE氏のこと)が小供の時から用ゐてゐた部屋である」

西遊夢錄

一四

五九

と只一言説明して階下に降りて行く。「先づ初めまして、兼ねてから御尊名は承つてゐます。御機嫌は如何ですか。この度はとんだ御厄介になりますか、どうか宜しく」てなことを日本同志ならば口上宜しくやり、またやらされるところであるそんな譯でこの晩は横に喋る國の有難さに、判り切つたことを縦に長たらしく喋る必要がなくなる。
 旅馴れせぬ身は前夜の疲れと船中の緊張とが一時に弛み寢臺に横はるや否や直に華胥の國に入る。
 翌朝は待ち兼ねたと云はんばかりに戸を叩いて市内を案内せんと老人は云ふ。
 案内記の讃辭ではアバチーンの町は歐洲第一の美しき市である。また花崗岩の都として何人も推賞を措まぬ都會であるどの家もこの家も悉く花崗岩で建てられて居り、煉瓦造りの

家などは殆どないと云つても可なりである。従つて表通本通りの街路はどこへ行つても綺麗である。塵一つ留めぬ綺麗さはあるが何となく冷さがある。寸泥靴を没し、屋並みが不揃ひで、板庇の上には寸餘の砂埃を堆積してある町家を見馴れて來た極東人の眼には一入の冷さを石造の家によつて感ずるそれは兎もあれ、花崗岩の都會を作つた材料の出所を見物すべく老人は案内して呉れる。花崗岩を採掘する石切場は峻

しき山の中腹にでも

あるかと思ひきや、

高地の眞中に池の如

く深くして大きな穴

を穿つてグレーンで

切り取りたる石材を

運び上げてゐるので

ある。石材採掘及び

搬出の模様や諸種の

石材の産地を町の高

層建築の實物につい

て老人は詳しく説明

をして呉れたが、土

木料若くは建築科專

攻ならば如何に興味

あることかと屢思つ

たのである。

トーリトスンオニユ



アバザーンは目貫きの場所ユニオン・ストリートに案内される。冷たい花崗岩の市の中心地である。この町には劇場、教會、圖書館の三つが相接して軒を並べてゐる。考へやうによつては皮肉である。修養の機關として現在未來過去の三世を貫いてゐる。E 老人に従つて一々建物の内部を窺つて見た後老人の好意で、共同市場の書店に行くことになる。買ひ度い

と思ふ書籍の餘

りに多數なるに

見惚れてゐると

さすが老人も待

ち佗びて早く立

ち去らんと促す

野趣を帯びて

面白きはアリツ

グ・オ・バルゴリ

(Brig O' Bal-

lowie) と云ふ

石橋である。日

本ならば眼鏡橋

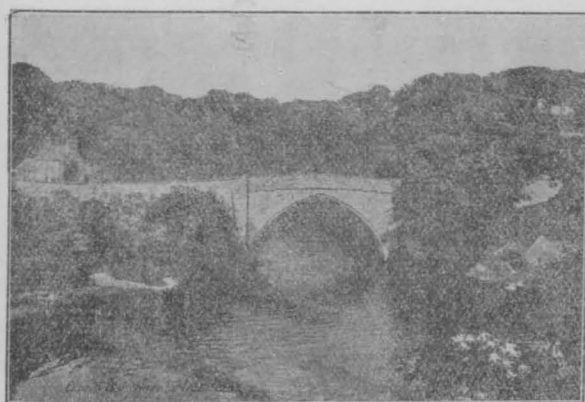
とか太鼓橋とか

名の付く形をし

た橋である。ロ

ーパート・アル

リゴルバ、オ、グツリブ



ース (Robert Bruce) と云ふ蘇國王時代から其儘に残存してある橋だとの説明を聞くと、自分には歴史的興味と共に中世ロマンズの興味が起る。十四世紀に榮えてゐた學者であり詩人であるバーバ (Barbour) と云ふアバザーンの副監督 (Archdeacon) が作つた韻文物語の蘇國英雄ローバート・ブルース (Robert Bruce) の武勇談がある。通俗にバーバ・ス・ブルース (Barbour's Bruce) として知られてゐるものがそれである。史實の上から見ての語説の確否はその専門家に委すとして、吾々にはこの物語を單に物語として讀んで面白いのであり、また讀んだものがいつまでも記憶に残る。この物語にはいつの戰として少數の蘇國人が多數の英蘭人を打ち破り、點綴するにブルースの剛勇智畧の偉勳と人情味に富んだ優しみを以てし、その旗下に集る蘇國の豪族等の武勇と友情、英人に身方する諸族の奸策、遂には英婦人が泣く子を慰すに黒鬼のダグラス (Douglas) が來ると云つた程の「無創」の英雄ダグラス (Douglas) と國王ブルース (Bruce) との悲愴なる最後など數へれば限りなき程の戰物語のふしは今この石橋を見て心に浮ぶ。太平記に書かれたる昔の陣法や戰鬪振りは今日の科學的戰爭から見れば小供の「いくさつ」に過ぎぬであらうが、それはそれで時代相應の空氣と場所とを連想し得る今日の讀者には興を減するものではない。韻文筆記物語のブルースの作家がアバザーンの理職であり、またブルースが十三世紀にアバザーンを征服したと云ふ史實によつて、ブルースの足跡がこの橋上に及んだことを連想する。佇みながら橋下を

眺めると深からぬ水が清く澄みて小魚の走り泳ぐさへ見える兩岸の茂みは綠を水に映じ、中世そのまゝの磨滅の石橋は讀みたる戰物語に實際の背景を作るのである。低き石欄に身を凭せて暫憩うてゐるとE老人は「つい近頃のこと、何某と云ふ小僧が二人までこの欄から落ちて溺死したことがあるから危い」とて老翁が孫にもの云ふが如き勞はり方をする。

詩人バーバ (Barbour) の僧宅などは今日その跡を尋ねる術もないが、古い教會と僧正の住宅 (Manse) とに案内されて後アバザーンの誇とするマリシヤル大學 (Marischal College) に行く。夏季休暇中にて諸教授が旅行して不在なりと聞き聊か落膽する。

アバザーンの市にて印象を深く留めるものの一はザイ (Dee) 河の清流である。故國の加茂河の水の清さ以上に清く澄み、兩岸の眺望亦廣潤であり、見る目をしてのび／＼した氣分を感じしめる。橋向ふに見上ぐる一帯の丘陵の斜面は綠麥の畑である。そのうちに紆餘陀陀に轄の一線をなして坂道が麥野を貫き丘陵の巔を超えてゐる。その坂道を疾驅する一臺の自動車までが景趣の一點となる。山腹に見ゆる建物の向ふにはE夫人が娘の頃に通つてゐた學校があると老人は指さして教へる。橋の袂にある淨水道は友人の設計に成るものと云つて詳しき説明がある。ザイ河の清流は科學者の頭腦を洗つて益々玲瓏たらしめると一人の科學者が他の科學者を賞めた昔の記事を想起しては今更の如く愉快な感じを抱く。河畔に沿うて行くこと一哩餘にして、美しく掃き清められた

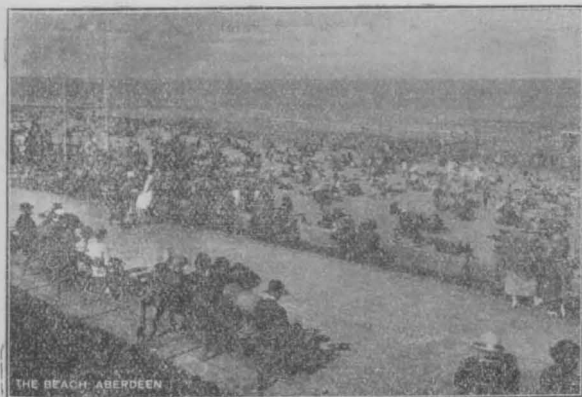
墓地に入る。植物園かと思はるゝ程に紅白種々の色を呈して植込まれた草花が今を盛りと咲き誇つてゐる。河畔の景情はこゝに明暗兩界の萬象を抱擁して人生須臾の感を清新ならしめるのである。墓地のベンチに憩ひながら老人は冗談半分に「美しい墓地である、人皆早晚此處に花を賞でる日が来る」と云つて瘦せ面の白哲の顔に微笑を浮べる。その老人は余が往訪の後、約半歳にして突然の訃音に接した。嗚呼！

アバザーンには誇る可き河が一つある。ドン(Don)河である。水量多く、諸種の工業、殊に製紙業に河水が用ゐられて居る。疲れた足をひきづりながら河橋見物に出かける。途次名物のアバザーン牛の集る家畜市場に行く。肥え太つたのや、稍不恰好なのを捕へては、一々Aberdeen angus bullやAberdeen shorthorn bullとか云つて説明の勞を老人は惜まない。家畜の大市場は肉食國ならでは見られない。家畜の種類が多きに興味をもつのも亦肉食國の人のみであらう。渡歐の途中埃及カイロ市の朝市に沙漠の奥から率ゐ來る家畜の群の多きを見て、その壯觀に一驚したことがあつた。何百となき羊の群、牛の群、馬の群、山羊の群を幾列かに並べて數哩の道を後より後より追ひ來る。馬に跨つて追へるもの、驢馬に乗つて追ふ小供や女、幌付きの荷車にて追へるものなどいつ果つべしとも思へぬ有様に一方ならぬ興を感じた、彼等の進む前方はアフリカ大陸の石造の大都會カイロの大厦高樓であり、彼等が背後に残すものは廣大無邊なる沙漠であつてピラミッドとスフィンクスとなもつ背景である。カイロの朝

市の壯觀を想ひ起してアバザーンの市場と比較しては大小の差は元よりあるが、家畜の種類の変化の多きことは恐らく前者の市場にも劣らぬであらう。只その道ならぬものには百羽の雀が一様に雀としが眼に映ぜぬと同じく多種多様の家畜を見てもまた説明を聞いても只聞いた一瞬間を除いてその後は廣汎なる概念の家畜(Cattle)の一語に抱含されて了ふのを遺憾とする。アバザーンでは鍊の朝市が見ものであると兼ねてから聞いて居たが朝寝坊の御蔭でそれを見る光榮を得なかつた。

倫敦でも昔に名高いピリンググズ・ゲート(Billinggate)の魚市場は遂に行く機会を同じ理由で自ら失つたのである。

夏季に市民の



岸海のシーザバア

出盛る海濱で單にザ・ビーチ (the Beach) と稱せられて居る處がある。遠淺とも思へぬ海岸であるが、海水浴場である。斯うした場所には有勝ちの種々の催し物が陸上で設けられてゐる。行つて見ると海岸に只人間の頭が黒山を築くばかりである。人々は何を見、何をやる爲めに其處に集つて居るのか判明せぬ。砂濱に横ばる若き男女、すまし顔に濱づたひを歩いてゐる獨り者、それをまた築堤の上から佇立して眺め込んでゐる人々が作る人垣、人垣を目的に賣り歩くバン屋、何れを見ても何の爲めにこんなに入出があるのか判らぬ。日常の行動に一舉手一投足必ずしも目的を意識してゐない人間が異國に來ると異國人の行動に目的を尋れる。矛盾と云へば矛盾であるが、對蹠國まで遙々來る人々に往々見受ける癖である自らも其癖に陥つてゐると思ふと吾ながらおかしな心地もせぬではないが、事實、そんな「目的探究病」に罹つてゐたのである。北海の波濤を見る爲めに來て居り、空の蒼碧を眺める爲めに家を出たのであり、日和ばつこする爲めに足を運んだのであり、新鮮な空氣を呼吸する爲めに來たのであり、海岸散歩の爲めに來たのであると簡單に片付けて了へばそれまでであるが。斯う人出が多いところを見ると、そんな簡單な説明では得心出來ぬ。必竟彼等は見るものとては少しも無きにも拘らず、見るが爲めに來、また見らるゝが爲めにのみ來てゐるやうに思へる。斯んな愚問は、倫敦は牛津街 (Oxford Street) か、リカディ (Piccadilly) にかけて毎晩毎晩兩側の歩道を押し合ひながら歩いてゐる男女老弱の群を見て度々起し

てはその儘忘れて了つた愚問である。日本のやうに夜間開店の國ならいざ知らず、夕六時から店と云ふ店が皆閉まつて居るのに、澤山な人が何を目的にうろつてゐるか、最初そんな疑問を起したが、いつの程か自分も亦そのうろつく連中の仲間入りをするやうになつてゐた。それすら忘れて今アバザーンの海岸で「見る可きものは海か人か」との愚問を老人に試る。老人はすましたもので至極達觀した返事をする。「日頃忙しき人間には斯うした *Idle hours* が必要である」と。この人込みの中にあつても知人に會ふ毎に余を紹介しては「これはチャール (Charles) (Charles の略稱) の勤めてゐる學校の同僚であつて、日本政府から派遣されて來たのだ」と云ふ。斯う云はれて見ると、それには違ひないが、所謂出張者流から「文留」として簡單に片付けられて了ふよりは品がよい。一週間足らずの寄食中、斯うして老人が知人に會ふ毎に余を紹介すること日に幾度あつたであらうか。

郊外遠く離れた公園に行く。例によつて廣く、自然林に入つたやうな感じがする。倫敦で公園の廣いのに驚いて來た今は、更にこゝで驚く程でもないが、都會の公園にて見られなかつた松林があつて故國の松と等しき濃緑の色を見せて茂つてゐるのに一人の愉快を感じた。

往訪の季節は七月の初旬であつたが、夕方十一時近くになつても猶薄明るく、朝は三時頃に既に明るい「未明に起き出で」などと云へば、夏季のアバザーンでは夜の十二時過ぎになる。禽鳥は心得たもので、十一時頃にどんなに明るくて

もまた三時頃にどんなに夜の幕が上げられてあても、雀の囀りさへも聞かない。日本と朝夕等同じ時刻になると雀は囀りはじめ、また時につく。これを知つて、一大発見でもしたやうに感心する。倫敦で既に夏の日永がに馴れて來てゐるもの、こんなのは初めての経験である。人間もまた雀と同じやうに適當な時間に寢臺から起き、寢臺に行く。只時計を見るか否かが雀との差である。

毎晩々々老人は蘇國語にて書かれた短語集を朗讀して呉れる。余が蘇語の學習に便せんと勞を惜まぬ老人の心づくしは感謝に餘りあるのである。畧蘇國語の了解が出來たと思ふ頃には見物に出かける途すがら或は老農夫を野に訪ひ、知人をその家に訪れる。農夫は鎌を片手に、佇みながら身の上話をなが／＼として呉れる。知人は日本のことを何呉れとなく尋ねる。倫敦に於けるよりはアバドンで會つた人々の方が日本に對して多くの理解をもつてゐるやうに思つたのもこの時である。

倫敦に歸つた後に、その話を英人にすると、それは出稼ぎ人の多い蘇國であるから當然のことだ一笑に附し去る。老人は「蘇國語が大畧耳に了解出來なければ獨り旅の者には不自由である」と云ふと、母堂は傍より嘴を入れて「蘇國語などを勉強せずに英語をもつと勉強しなさい。長男（今歐洲の一大學の歴史の教授かしてゐる博士のこと）のやうに勉強して學位でもおとり、日本に居るチャーリにも歸國したらさう云つてお呉れ」と強意見である。本を讀み飽いた時には老人

は樂器クラリネットをとり出して種々の曲を吹奏する。これも吾が旅愁を慰めんと心づくしの一つである。時には老夫婦共に口を揃へて「歸國したら日本のチャーリによくしてやつてお呉れ」と云ふことが折々あつた。一週に一回遠郷にある二人の小供に手紙を書き、また小供からの手紙を讀むことを唯一の樂しみにしてゐる老父母のその日その日の日永もさぞかしと思はれて、涙ぐましく感ずるのである。

四方八方の話の序に老人は「倫敦では蘇國人の惡口を聞いただらう」と云ふ。聞かぬでもないと答へるうちに、所謂蘇國人のコーカーニー(Cockney)の話に移る。

その二

英蘭人の眼には蘇國人は田舎者に見えたであらう、今日もまたさう見えるであらう。倫敦にてあふ英人で蘇國人のことを賞める人は尠い。然し貶す人々の言葉の大半は當つてゐないらしく思はれる。今日倫敦にあつて大英國を代表する社會各方面の成功者中には随分蘇國出身の人々が多いのである。政治家にせよ、藝術文學の名士にせよ、實業家にせよ、名をなせる蘇國人を人名錄(Who's Who)中に物色するならば、その數の多きに驚くであらう。年一回倫敦で開かれる蘇國人會の開會の辭をワイヤ・レスで聞いたことがある。首相自らが臨席して蘇國人の長所短所をあげて出席者を笑はした。曰く、蘇國人にして今日名を成せるものの多くはもと貧乏人であつた。貧乏人は最初は吝嗇坊である。然しそれは當然で

摘 録

ある。蘇國人は他國人から吝嗇坊だと云はれても怒らない。自ら吝嗇坊の話草を拵へて笑ひの種を製造して悦んでゐる。また男女共に勤勉である。昔はウイスキーをよく飲んだが、今日は他國に賣出す爲めに醸造しても、自ら飲む爲めに醸造しない。教育は英蘭に於けるよりも盛である。頭腦は明哲であり、冷静で沈着である。利害には遠視が利く、てなことを云つて貰めたやうなまた貶したやうなことを云つてゐたことがあつた。

扱て本題に歸つて、コーカーニーとは蘇國人の瑣事に用心深く金銭に吝嗇坊のことを云ふのである。ものの本にもあり、老人の口からも聞いた話ではあるが、どんな話か紹介に及ばう。

一蘇國人が倫敦に来て晝食をとらんとてある料理店に入つた。食卓に就くと食卓に二片の銅貨が置かれてゐるのを見付けた。「勿體ない、誰か二片を置き忘れておいた。棄ておくのも無駄である」と云つて自分のポケットに入れた、註に曰く、これは倫敦では晝食に一志餘を拂ふと、給仕人にチップとして二片の銅貨を黙つておいておくのが習慣である。蘇人はそのチップの二片を失敬して自分のポケットに納めたのである。蘇人の吝嗇坊を代表する一挿話である。

この話は既に五十年前も前に E. F. Ransley が著した書物に載つてゐる話である。而かもその本には既に昔からある話として記載されてゐる處から見ると、随分昔からの話である

○森爲三 濟州島及對馬の動物分布の狀を考察して内鮮兩陸分離の時代と其の時代の狀態とを推論す(朝鮮第一五二號一四—二五頁昭和三年一月)

濟州島の動物分布を見るに先づ鳥類は其の種百十三に達するが、本島と朝鮮とに産し内地に産しないものにカウライイキジ、カラシラサギ、マミジロキビタキ、サイシウヤマガラの四種がある。就中カウライイキジが居ることは朝鮮に近い事を示す有力な證據である。又濟州島と内地とに産し朝鮮に産しないものにウグヒス、スズメ、イイヅマホホジロ、コカハラビハがあるが何れも其の近似亞種が朝鮮に産する。濟州島には兩棲類七種爬蟲類七種ある。うち本島特産種と認むべきものはサイシウサンシヤウリチだけで其に近いものは朝鮮のテウセンサンシヤウリチと對馬下島のキタツシマサンシヤウリチで九州のアチサンシヤウリチは縁の遠いものである。濟州島と朝鮮とに産して内地に産しないものには兩棲類にアカハラカヘル、メンコンカヘル、テウセンヒキカハルの三種があり、爬蟲類にスベトカゲ、シロスチガナヘビ、サラサヘビ、キスジヘビ、テウセンマムシの五種がある。而して濟州島と内地とに産して朝鮮に産しない種類は見當らず、他は悉く内鮮濟州島共通種である。故に濟州島の兩棲及爬蟲類は明かに朝鮮